

【調査報告】

農山村における福祉的課題に対する相談支援の困難と課題

－福祉支援者へのインタビュー調査を通して－

高木 健志

和文抄録

本稿は、農山村の福祉的な生活課題をとらえ、相談支援における困難と課題を明らかにすることを目的として、農山村の福祉支援者4名に調査を行った。調査は、半構造化面接を行い、定性的（質的）分析を行った。その結果、農山村における福祉支援者の困難として〈必要な支援がスムーズに届けられない〉、〈多様な課題を抱えた世帯への対応〉、〈仕方がないがやるしかない〉、〈距離が遠いことに加えて制度とのズレから生じる課題〉が見出された。これらのことから、農山村における相談支援の課題として「文化的課題」、「実践的課題」、「制度的課題」を明らかにした。

キーワード：農山村、福祉的課題、相談支援、福祉支援者

I. 問題の背景と先行研究

近年の福祉施策は、地域を基盤として展開されている。高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう「地域包括ケアシステム」が推進され、さらに「我が事・丸ごと」というスローガンのもと、地域共生社会の実現が目指されている（厚生労働省2015;2016）。障害福祉領域では「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」が展開されている（厚生労働省2017）。地域を基盤とした、住み慣れた場所での暮らしを支えていく中で、重要な役割を期待されているのが、介護保険法では介護支援専門員、障害者総合支援法

では相談支援専門員である（以下、福祉支援者、とする）。

また、今日的な課題として人口減少が挙げられる。なかでも、集落人口が9人以下でかつ高齢化率が50%以上の集落を「存続危惧集落」とされ、この存続危惧集落の9割が中山間地域に所在する、と指摘されている（農林水産政策研究所2020）。「中山間地域等」は、「山間地及びその周辺の地域その他の地勢等の地理的条件が悪く、農業の生産条件が不利な地域」とされる（農林水産省1999）。本稿では、人々の生活とその支援に着目することから、統計に用いられる中山間地域ではなく、人の暮らしの営みの場をあらわす農山村を用いることとする。なお、本稿において「農山村」を、「山間地及びその周辺の地域その他の地勢等の地理的条件が悪く、農業の生産条件が不利な地域であり、かつ農業・林業を生業の中心とした集落とその集まり」とする。具体的には、家は隣家と田畑を挟んで50メートルほど離れ、集

2022年6月30日受付／2022年11月14日受理

TAKAKI Takeshi

佛敎大学社会福祉学部社会福祉学科

E-mail: t-takaki@bukkyo-u.ac.jp

落は10軒程度で構成され、集落と集落とは1kmほど離れているという風景である。

農山村を含む中山間地域等の福祉的課題に関する国内の先行研究に目を向けると、福祉的課題に関する研究と、福祉支援者を対象とした研究に大別できる。福祉的課題に関する先行研究については、相川(2006)が、農村(京都府美山町)と都市(東京都足立区柳原町)との人口構成の比較を行い、その結果から、高齢者が抱える不安は、身体面、経済面、家族構造等に影響されることを明らかにしている。また、北川(2000)は、京都府北部の中山間地域に居住する高齢者を対象に、介護に関する意識調査を行い、その結果から、中山間地域の高齢者には潜在的に介護ニーズが高いことを明らかにしている。高野(2011)は、中山間地域の住民に対して調査を行い、過疎高齢地域住民が抱える将来的な展望として、将来に対する期待を持つことのできない人々が多数を占めているとしている。高木(2020)は、統計資料を基に、都市部と地方との福祉サービス事業所数の比較を行い、その結果、都市部と地方との住民が、利活用できるサービスの量には、地域的に差が生じていることを指摘している。福祉支援者を対象とした先行研究について、鈴木(2015)は、介護支援専門員、地域包括支援センター職員、社会福祉協議会職員ら専門職を対象に、中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズの構成要素に関する調査を行い、中山間地域の高齢者は経済的な不安や医療の不安を強く抱えていることを明らかにしている。高木(2019;2021)は、農山村に退院した精神障害者の訪問支援に関わる精神保健福祉士に対してインタビュー調査を行い、社会資源に乏しい農山村の支援では、一人の福祉支援者が、いくつもの福祉的課題への対応を迫られていることを報告している。

このように、農山村を含む中山間地域に関する先行研究に関しては、住民らの生活ニーズを把握し、福祉支援者の実践を通じた知見が得られていくとしている。しかしながら、農山村の住民が抱える福祉的課題や、それら課題に日々対応している福祉支援者の実践に着目した調査研究はまだ

十分とはいえず、知見の蓄積が必要であると考えた。

II. 研究の目的

前述の問題意識をふまえ、本研究では、農山村の福祉支援者が抱える困難や課題を明らかにすることを目的とした。

III. 研究の方法

1. データの収集

調査協力者の選定にあたっては、自分自身の実践経験を語るができること、農山村における支援実績があること、という要件を事前に設定し、調査協力を得られた4名の福祉支援者を対象に半構造化面接によるインタビューを行った。「農山村の住民支援において、難しさを感じた経験」「農山村で支援を実施していくうえで課題だと感じる」というインタビューガイドを事前に作成し、半構造化面接によって実施した。調査にあたっては、事前に文書と口頭で了承を得た上で、録音・記録した。調査期間は、2019年5月～2020年2月まで、調査時間は1回あたり90分程度であった。

2. 倫理的配慮

調査実施にあたっては、本学会研究倫理指針を遵守した。調査協力者に対して、調査の実施前に、本研究の目的及び方法について口頭並びに文書を用いて説明し、書面による調査協力の意思確認を行った。なお、本調査は、山口県立大学生命倫理委員会にて事前に承認を得たうえで実施した(承認番号30-2号)。

3. 分析方法

分析には、佐藤(2014)による定性的(質的)コーディングを援用し、データからコーディングを行う帰納的アプローチを用いた。この定性的(質的)コーディングは、ケアマネージャーを対象とした研究でも用いられており(村社2012;

橋本 2016)、今回の分析方法として妥当であると判断した。まず、テキストデータを読み込み、内容をあらわす「コーディング」を行った。そして、いくつかのコードをもとに抽象度を高める作業を行い、コードの上位に位置づく「カテゴリー」を付した。逐語録化したデータの分析は一貫して筆者が行った。なお、表示したデータにおける（ ）内は筆者による補足を行っている。カテゴリーは〈 〉で表し、コードは〔 〕で表した。

分析は、具体的には以下の手順で行った。まず逐語録化したデータを読み込みながら、「山間部に行くときに気をつけるのは、やはり、まだ、田舎、村意識があるので、障害者というところを知られたくないという方たちもいるので『施設の車で来てくれるな』とか『分からないように来てくれ』と言われるようなことが、ないことはない」というデータに関心をおき、その後も継続的に検討をすすめた。その過程で、「障害者がいるっていうことを近所に内緒にしている人とかも、田舎のほうに行けば行くほど多いんじゃないかなと思うね」という別のデータも確認されたことから、この2つのデータから〔障害を持つ家族がいることを隠したい心情〕とコーディングを行った。この手順で、コードを生成し、これらを〈必要な支援がスムーズに届けられない〉というカテゴリーとした。分析にあたっては、質的研究に詳しい研究者で構成された研究会にて報告し、ピアスーパービジョンの機会を得て、妥当性と信頼性の確保に努めた。

IV. 研究結果

1. 調査協力者の属性

調査協力者については、いずれも農山村を含む福岡県 A 校区と熊本県 B 校区にある事業所の福祉支援者からインタビューを行った(表 1)。福岡県 A 地区は、人口約 22 万人、熊本県 B 地区は、人口約 4 万 7 千人である。4 人は全員、農山村で相談支援を行っている。

2. 調査結果の概要

分析の結果、以下に説明するとおり、4 カテゴリーと 14 コードを生成した(表 2)。

(1) 〈必要な支援がスムーズに届けられない〉

このカテゴリーは、〔障害を持つ家族がいることを隠したい心情〕、〔介護を要する家族がいることを隠したい心情〕、〔制度が知られていない現実〕、〔福祉サービスが拒まれる〕、〔自己責任意識〕、〔サービス利用に対する近隣からの視線〕という 6 コードから生成された。〔障害を持つ家族がいることを隠したい心情〕は、福祉サービスを利活用していることを、近隣住民に知られないようにという求めが、福祉支援者に来ることである。〔介護を要する家族がいることを隠したい心情〕は、世帯のなかに認知症に起因する介護に関する福祉的課題が生じた際に、介護サービスといった福祉制度のサービス事業を利活用しているにもかかわらず、それを近隣住民に知られないようにという求めが、福祉支援者に来ることである。〔制度が知られていない現実〕は、介護保険や介護保険のサービスについて、それを最も必要とされる状況にある住民が知らない、という状態のことである。〔福祉サービスが拒まれる〕は、

表 1 調査協力者

ID	地区	勤務先種別	経験年数	性別	職名	資格等
①	A	障害福祉サービス等事業所	22	男性	サービス管理責任者	相談支援専門員
②	A	介護老人福祉施設	15	男性	介護支援専門員	社会福祉士
③	B	居宅介護支援事業所	29	女性	介護支援専門員	介護福祉士
④	B	居宅介護支援事業所	29	女性	介護支援専門員	介護福祉士

サービスの活用を促しても、拒否されることを懸念される状況のことである。〔自己責任意識〕は、自分たち家族のなかのことは、自分たちの力で何とか対応しなければならないという、自己責任の意識がある状況のことである。〔サービス利用に対する近隣からの視線〕は、福祉サービスの利活用に対して、近隣住民らから批判的な視線や関心が寄せられる状況のことである。

(2)〈多様な課題を抱えた世帯への対応〉

このカテゴリーは、〔「介護婦郷世帯」への対応〕、〔「高齢の親と障害の子世帯」への対応〕、〔「高齢の親と無職の子世帯」への対応〕、〔「関係が悪い同居世帯」への対応〕の4コードから生成された。〔「介護婦郷世帯」への対応〕とは、農山村で生まれ育ち、いったん、都市部等へ進学や就職を機に他出していったものの、高齢の親の介護のために帰郷してくるUターン介護によって再構成された世帯へ対応することである。〔「高齢の親と障害の子世帯」への対応〕とは、高齢の親と障害をもつ子との同居という世帯員で構成された世帯へ対応することである。〔「高齢の親と無職の子世帯」への対応〕とは、まだ介護を要するわけではないが高齢の親の元で、障害などのない子が他出後に帰郷し、さらにその中年の子はとくに仕事をするわけでもなく無業の状態で同居している世帯へ対応することである。〔「関係が悪い同居世帯」への対応〕とは、多世代で同居はしてはいないものの、おりあいが悪いことで、支援を要する

者の日常生活が難しい世帯へ対応することである。

(3)〈仕方がないがやるしかない〉

このカテゴリーは、〔境界線の引きにくさ〕、〔いくつもの役割を担う〕の2コードから生成された。〔境界線が引きにくさ〕は、福祉支援者が利用者宅を訪問した際に、本来業務ではない相談がされるものの、本来の業務ではないと断ることができないことである。〔いくつもの役割を担う〕とは、利用者への支援として訪問するも、本人への支援に加えて、世帯員に対するサポートを行わざるを得なくなり、一人の福祉支援者が、本来の役割以外にも状況に応じて、さらに本来の役割以外の役割も併せて担うことである。

(4)〈距離が遠いことに加えて制度とのズレから生じる課題〉

このカテゴリーは、〔距離が遠いという課題〕、〔中心部と同一地区扱いで加算が取れない〕の2コードから生成された。〔距離が遠いという課題〕は、事業所のある中心部からの距離を理由に、訪問する福祉サービス事業者がないことである。〔中心部と同一地区扱いで加算が取れない〕とは、実際には農村部であるにもかかわらず、市町村合併によって、行政の地区単位としては、中心部と同じ地区として扱われるため、たとえ中心部から遠く離れた農山村部であったとしても加算がつかないことである。

表2 農山村における相談支援の困難と課題（一覧）

カテゴリー	コード	データ
〈必要な支援がスムーズに届けられない〉	〔障害を持つ家族がいることを隠したい心情〕	山間部に行くときに気をつけるのは、やはり、まだ、田舎、村意識があるので、障害者というところを知られたくないという方たちもいるので、「施設の手で来てくれるな」とか「分からないように来てくれ」と言われるようなことが、ないことはない／障害者がいるっていうことを近所に内緒にしている人とかも、田舎の方に行けば行くほど多いんじゃないかなと思うね
	〔介護を要する家族がいることを隠したい心情〕	今、(介護福祉の)事業所によっては(公用車に事業所の)名前を付けていないところもありますね、そういった声があるからということで、わざとですね、「近くに停めてくれるな」とかいう方もいらっしやいます／自分たちの中のことは、みんな分かっているけれど、なおかつ、もっと隠したいとかいうところは、あるみたいですね
	〔制度が知られていない現実〕	「介護保険って知ってますか？」って聞いたら「そんなことは知らん」ということで、説明をして／「何で、もっと早く(福祉支援者に連絡をしてこなかったのか)？」って言ったら、「そういうところがあるのを知らなかった」とか

農山村における福祉的課題に対する相談支援の困難と課題

	〔福祉サービスが拒まれる〕	(福祉サービスの紹介をしても、その利用に対して)かたくなやもんね、そういう昔の人のところって
	〔自己責任意識〕	もともと、自分たちのことは自分たちで、という思いの方も結構いらっしやって／自分の親子のことは自分たちでしないと…(中略)…嫁さんがして当たり前前の仕事を、どうしてほかの人(ホームヘルパー)にやらせるんだ、とかです
	〔サービス利用に対する近隣からの視線〕	よく聞かれるんですよ、「あそこの家の、あの人は、どげんしとるね」「ああ、気になりますよね、でも僕たちも、こういう仕事だから、それだけは言えないんですよ」…(中略)…探ろうと思って聞かれる方もいらっしやるからですね／「地域の人に「あんた、そぎゃん元気よかところに、何で(介護事業所から支援に)来てもらいよるの?」と言われる
〈多様な課題を抱えた世帯への対応〉	〔「介護帰郷世帯」への対応〕	転勤ででかけておられた息子さんが仕事を辞めた、家へ、認知症の進んだお母さんのところに帰ってきたことで、家から出ないように、と、…(中略)…「母のために管理職をやっていたのに辞めて帰ってきて、ゼロからのスタートで、息子の大学のお金もかかるし、嫁は(いっしょに農村の実家)来てくれんやっだし、俺は一体どうしたらいいんだ」ということで
	〔「高齢の親と障害の子世帯」への対応〕	精神障害を持っている方で、かといって、精神(科)病院に通っておられるわけじゃなくて、認知症のお母さんと、そういう方との二人暮らしとか／お母さんに認知症があって、娘さんと息子さんとの3人暮らしなんですけども、娘さんも息子さんも精神障害なんですよ、歳は60歳を過ぎていらっしやる息子さん、お母さんが90歳過ぎですかね、そこなんかは本当に田舎の山の中で、冬なんかは、すきま風が入って
	〔「高齢の親と無職の子世帯」への対応〕	多いです、多いです、むちゃくちゃ多いです、50代で奥さんと離婚して帰ってくるとか、息子さんだけが、とか、親と一緒に暮らさないといけないから□□に帰ろうと言っても、誰もついてきてくれなかったとかです、だから、息子さんだけが帰ってきたとか、離婚して、奥さんに出て行かれて息子だけが残ってるっていう家が多いですよ、家土地があるわけですからね、そんな、積極的に仕事をしなくても何とかなる、食うものも困らないわけですよ、畑もあるしですね、意外と多いです、最近、また、あの息子が帰ってきたとか、結構多いです、とか、だから障害を抱えていなくても、仕事をしなくなった、親の年金を頼っているのか、それで暮らしているのか分かりませんが、8050問題なんか、親と一緒に住んでいて引きこもりとか、障害とかって言われてますけど、仕事も障害もなく、ただ働きたくなって帰ってきたとか／「あの人が、まさか奥さんに捨てられるとは思わなかったね」とか、「あそこは、お父さんもお母さんも元気やけん、(単身で帰郷した)自分は楽なもんだ、(畑の野菜などを)採って食うだけでいいけん」とか、そういう話もよく聞きます、デイサービスで聞いたり
	〔「関係が悪い同居世帯」への対応〕	息子夫婦と、お孫さんと、全部で6人家族なんです、そこがご本人さんと新しく家を建てていらっしやるんですけど、おじいちゃんなんですよ、おじいちゃんのご家族、お嫁さんとうまくいってなくて、お嫁さんがご飯をつくってくれない、…(中略)…家族がなかなかかかわってくれない、…(中略)…子どもさんが今、中学生と小学生かな、だから、たぶん子どもの食事にあわせて、同じようなものだったんでしょ、お年寄り向けに、特別につくってやったりとかは、されないみたいで、薬も飲んでいなくて、それでまた入院という感じで、今もちょっと入院中なんですけど、帰られてから、どうなるのかなって、ちょっと心配している
〈仕方がないがやるしかない〉	〔境界線の引きにくさ〕	「ここからここまでが、ペーパーに書いてあるとおりで、これから先は(契約書に)書いてないけん、できません」とは言えないですもんね、そうなると、ときどき「えっ、これケアマネの仕事?」っていう領域は感じますもんね、／「ここは仕事の範疇じゃない」っていう訳にもいかないときもありますもんね、／どこまでがケアマネさんのお仕事かというのは、線引きがないのと同じだけけん、／「ここまでは、仕事範囲は、」っていう訳には、いかないけん、
	〔いくつもの役割を担う〕	精神科病院に通っておられるわけじゃなくて、認知症のお母さんと、そういう方との二人暮らしとか、結構そういうところもね、両方をみらないかんっていう感じになって、本人さんだけじゃなくて、介護者のそういうサポートっていうのも結構ありますよ

〈距離が遠いことに加えて制度とのズレから生じる課題〉	〔距離が遠いという課題〕	「住み慣れた地域で、いつまでも」と地域包括ケアは言ってますけど、無理ですよ。ヘルパーさんが来てくれないですもん。でも、この辺の人って「買い物さえ、してくれればいい」とかいう方が多いですから、その買い物さえしてくれるヘルパーが来ないとなったら、どうしたものかなと思って、そこを何か考えていけたらいいなとは思っているんですけど。だから本当に、ヘルパーの時間に合わせて、本人のお風呂に入っていただく。「あんた、7時ぐらいに、お風呂に入りたかよ」「いやいや、そんな贅沢は言えませんよ」ということが、この地域は。
	〔中心部と同一地区扱いで加算が取れない〕	僕たちは、この中山間地域で仕事をしてても（書面上では、市に入るので）加算が取れないわけです。こんな馬鹿な話がありますかと。△○（集落名）の人を迎えに行かないわけがないじゃないですか。だから本当は、△○（集落名）に行ってる、どこの事業所も、一般よりも高い加算が付くということであれば、交通費も移動費も加算を付けてくれば、もしかしたら来てくれるところがあるかもしれないんですけど

V. 総合考察

本研究は、農山村の福祉的課題と支援実践における課題を明らかにするために、福祉支援者4名に半構造化面接を行った。分析の結果、4カテゴリと14コードが生成された。

1つ目に〈必要な支援がスムーズに届けられない〉カテゴリが生成された。〔障害を持つ家族がいることを隠したい心情〕、〔介護を要する家族がいることを隠したい心情〕、〔制度が知られていない現実〕、〔福祉サービスが拒まれる〕、〔自己責任意識〕、〔サービス利用に対する近隣からの視線〕という6コードから構成される。〔障害を持つ家族がいることを隠したい心情〕、〔介護を要する家族がいることを隠したい心情〕は、農山村の集落はたいてい10世帯程度で構成されている。隣家との距離が100メートルほどあるとはいえ、それぞれ世帯の状況は筒抜けに近いと考えられる。しかしながら、それでも住民は、福祉サービスの利用を周囲に知られまいと、隠そうとする場面に、福祉支援者は直面している。必要とする福祉サービスを、自由に、堂々と利活用することに抵抗感があるという、住民が持つ福祉サービスに対する負の意識が表出している場面であると考えられる。その要因には、〔自己責任意識〕と〔サービス利用に対する近隣からの視線〕コードとが大きく関連していると考えられる。何とか自分たちで解決しようとするここと、近隣からの冷ややかな視線や関心が、堂々と、福祉サービスを利活用することを隠させたり、自宅で介護してい

ることを抱え込ませてしまう要因として考えられる。「この程度のことで助けを求めてはいけないのだと、自己責任論的に思い込んでいるのかもしれない」（高野 2020:14）のであれば、福祉サービスは積極的に利活用していいのだと、住民の持つ福祉サービスを利活用する意識を、正の方向へ変えていく働きかけが必要である。さらに、〔制度が知られていない〕コードが、福祉サービスの利活用を必要とする状況であるにもかかわらず、誤った理解や判断につながり〔福祉サービスが拒まれる〕コードへと関連すると考えられる。高野は「在宅サービスの利用は、ホームヘルパーなどといったサービス提供者の家庭への出入りがあるため近隣からの視線を持続的に浴びざるをえない。このことは利用者である高齢者自身に加えて、家族の意向によってサービスの利用が左右されることをも意味する」（2004:90）と指摘している。一般的に、農山村の住民同士は都会と比べて関係が強いといわれることもあるが、かえってこの関係や関係に対する住民の意識が、堂々と必要に応じて、福祉サービスを利活用することを阻害している状況を生み出している。いずれも、福祉サービスの積極的な利活用を阻むものとして考えることができる。

2つ目に〈多様な課題を抱えた世帯への対応〉カテゴリが生成された。〔「介護帰郷世帯」への対応〕、〔「高齢の親と障がいの子世帯」への対応〕、〔「高齢の親と無職の子世帯」への対応〕、〔「関係が悪い同居世帯」への対応〕コードから構成された。〔「介護帰郷世帯」への対応〕からは、親の介護のために農山村集落に帰郷する現実、

容易なことではない様子が理解できる。介護離職への支援のほか、介護帰郷者に対する自治体等の支援策の検討が早急に必要である。〔「高齢の親と障がいの子世帯」への対応〕から、親の介護と子の障害への支援という「ダブル支援」が福祉支援者に同時に求められる状態であることが明らかになった。一人の福祉支援者が、制度に関わりなく、いくつもの役割を担う状況に立たされている状況であることが浮かび上がってきた。〔「高齢の親と無職の子世帯」への対応〕から、就職などで一旦他出したものの、再び帰郷し同居を再開するという世帯の形態が明らかになった。介護帰郷の世帯と違うのは、まだ親が介護を必要としない状態である。子は世間的には壮年期を迎えるなどして社会的にも活躍を期待される年代であるものの、仕事に就くこともなく、高齢の親の収入に頼るなどしている、いわゆるひきこもりの形態を含んでおり、福祉支援者は世帯におけるケア機能に不安定さを強く感じている。ソーシャルワークの視点から、ひきこもりの調査研究を行っている山本は、ひきこもりを「当事者や本人に問題があるのではなく、私たちが生きている社会に多くの問題があることから生じている社会的な課題」(2021:4)と指摘している。農山村における中年のひきこもりの実態調査を行い、支援策について、住民や福祉支援者とともに検討していくことが急務である。〔「関係が悪い同居世帯」への対応〕とは、同居しているものの世帯成員間の関係が悪いことに対して、福祉支援者は気がかりではあるものの具体的な介入までには行きつけない状態である。高野・徳川は、「多世代同居の家族構造を前提とした介護が、もはや自明のものとしては通じ」(2021:536)ないと指摘している。独居世帯であれば、福祉支援者は、相談支援の必要性を高く意識する一方、多世代が同居している場合だと、家族内でのケアは機能しているはずだ、と相談支援の必要性は高くならない場合もある。多世代同居ならば家族内ケアに任せられるので安心だという先入観は、一旦脇において、どのような世帯状況であっても、よくアセスメントすることが福祉支援者には必要になる。このように、実際

の農山村世帯の状況は、複雑化し、抱える課題も重層化している。介護保険法や障害者総合支援法に規定される範囲ばかりでなく、「家族への具体的な働きかけ」(得津 2005:77)として、いわば家族ソーシャルワークの役割も担っていることになる。

これに連動するように、3つ目の〈仕方がないがやるしかない〉カテゴリーが生成された。〔境界線の引きにくさ〕、〔いくつもの役割を担う〕コードである。農山村では、それぞれの制度の福祉支援者がいない場合もあり、そのようなときには、今回のインタビューデータにもあるように、子に係った障害福祉サービス事業所の福祉支援者が、高齢の親の介護問題にも対応する状況が生じたり、高齢の親の介護支援をきっかけにかかわったところ、同居する障害をもつ子の支援にも対応する必要が出てくるなど、領域を横断するように支援を行わざるを得なくなる。そうなれば、福祉支援者は、ここからは業務ではないと言いつらい〔境界線の引きにくさ〕に立たされる。さらに、農山村では多様な専門職がいないので、多領域にまたがる支援を自分で何とかするほかない〔いくつもの役割を担う〕こととなる。和気は、高齢者ケアマネジメントの困難ケースを分析し、多問題家族の存在と問題の重層化を指摘したうえで「全体関連性を対象とするソーシャルワークによるアプローチがより一層求められることが明らかになった」(2005:118)と指摘している。本調査研究の調査協力者の背景は多岐にわたったが、これも農山村の相談支援の現状である。いま、農山村の実践の場で、様々な背景をもって活躍する福祉支援者へ、ソーシャルワークが持っている価値や知識、技術をベースとした相談支援の研修体制を講じていくことが求められてくると考える。

4つ目に〈距離が遠いことに加えて制度とのズレから生じる課題〉カテゴリーが生成された。〔距離が遠いという課題〕、〔中心部と同一地区扱いで加算が取れない〕コードから構成されている。〔距離が遠いという課題〕コードは、距離が遠いということを理由に訪問する事業者がないという課題視されるべき状況のことをいう。農村部

は、中心部から遠い距離に位置している。これまでも、農村部における交通の問題は議論されている(加来2015)。本調査結果から、距離が福祉サービスの提供にも影響を与えていることが明らかとなった。さらに、「中心部と同一地区扱いで加算が取れない」コードは、市町村合併によって、たとえば農村集落であっても「市」ということになるために、介護保険制度に基づいた訪問支援などをサービス事業所が行っても、加算がつかないことを指す。サービス事業所が所在する中心部から農山村は遠く、採算面から訪問などの支援に消極的にならざるを得ず、その結果、住民は必要な支援を受けることができない、という状況が生み出されている。

例えば、熊本県山鹿市を例にとろう。人口約5万人で、総面積約29,969haのうち約60%の約18,687haが田畑や山林である(山鹿市2021)。山鹿市菊鹿町矢谷地区から、市内中心部にある山鹿市民病院まで自動車ですら約30分かかる。路線バスはすでに廃止されており、乗り合いタクシーもあるが、事前予約が必要である。つまり、その日に病院を受診したいと思っても、公共交通機関を使って通院することが極めて困難な状況である。そのような地理的状況の矢谷地区だが、厚生労働省が示す特別加算のつく「中山間地域」には入らない。その結果、農山村へ出向くサービス事業者が見当たらなくなり、住民は必要とする福祉サービスを、住み慣れた農山村で活用することができないという悪循環に陥ってしまう。徳野は、都市部と農村の便利さに差がある状況を「システム過疎」と指摘している(2004:167)。これを本稿の文脈に借定すると、距離が遠いため経営的な側面から、サービス事業者が住民の支援を躊躇してしまうという「福祉的システム過疎」が起こっているといえよう。このような状況に対して何らかの手立てを講じなければ、住み慣れた地域での支援を謳う「地域包括支援システム」を実現させていくことは非常に困難となる。そのための一歩として「少ない人口でも生活の質の高い社会を目指す」(徳野2004:167)すことを、社会全体で共有する必要がある。

本研究では、〈必要な支援がスムーズに届けられない〉、〈多様な課題を抱えた世帯への対応〉、〈仕方がないがやるしかない〉、〈距離が遠いことに加えて制度とのズレから生じる課題〉という4つのカテゴリーが見出された。〈必要な支援がスムーズに届けられない〉カテゴリーから、福祉サービスは必要な時に活用していくことが住み慣れた農山村で生活を継続していくには重要であることを住民に向けて周知する啓発活動などを展開し、福祉サービスに対する住民の意識を改善していく、いわば「文化的課題」が見出される。次に、〈多様な課題を抱えた世帯への対応〉と〈仕方がないがやるしかない〉カテゴリーから、一人でいくつもの役割を担わざるを得ない農山村を担当する福祉支援者に対して、さまざまな技術や知識習得のための継続的なフォローアップの手立てを講じていく、いわば「実践的課題」が見出された。そして、〈距離が遠いことに加えて制度とのズレから生じる課題〉カテゴリーから、制度に人々の暮らしを合わせていくのではなく、たとえ農山村でも人々が住み慣れた場所での暮らしに制度が合わせていくという、制度が実態に応じて柔軟な運用ができるように取り組む「制度的課題」が見出された。

人の生活の営みを支えていくことが、ソーシャルワークの役割のひとつであろう。そうだとするならば、人口の多・少にかかわらず、質が担保されたサービスが、どこでも供給できる社会の構築のために、いまこそ、ソーシャルワークの観点から社会への提言が必要とされる。

VI. 結論と今後の課題

本稿は、農山村の福祉的な生活課題をとらえ、相談支援における困難と課題を明らかにすることを目的として、農山村で相談支援を実践する福祉支援者に調査を行った。調査は、半構造化面接を行い、定性的(質的)分析を行った。その結果、農山村における福祉支援者の困難として〈必要な支援がスムーズに届けられない〉、〈多様な課題を抱えた世帯への対応〉、〈仕方がないがやるしかない〉

い)、〈距離が遠いことに加えて制度とのズレから生じる課題〉が見出された。これらから、農山村における相談支援の課題として「文化的課題」、**「実践的課題」**、「制度的課題」が挙げられた。

今後の課題を以下に挙げる。まず、社会福祉士や精神保健福祉士の有する資格の有無による違いがあるのかどうかという比較、また経験年数や調査地の違いに関する比較を行っていく必要がある。このためには、今後、調査地の地域を拡げるとともに、福祉サービス利用者やその家族らを含めた住民、また福祉支援者へのそれぞれの調査を行っていく。また、都市部の福祉支援者へ、同様の調査を行い、都市部と農山村部における比較調査等を行っていくこととする。

本稿を通じて、現代の農山村の住民が抱える福祉的課題は重層的であるということと、それに対して福祉支援者は、一人でいくつもの役割を担いながら対応している、ということ、多くの方に伝えたいと考えた。今後も引き続き、見えているけども見ていない現実を明らかにして、社会状況の変化と人々の暮らしに重要な役割を果たすソーシャルワークに関する調査研究をすすめていきたい。

謝辞

本研究について調査協力をいただいた4名の福祉支援者の皆様に心から感謝申し上げます。質的分析についてご助言くださった佛教大学塩満卓先生、佛教大学金田喜弘先生、明星大学鈴木裕介先生、神戸学院大学橋本力先生、英文についてご助言くださった山口大学セネック・アンドリュウ先生に感謝申し上げます。また、本研究はJSPS 科研費 18K02157, 22K02021 の助成を受けたものです。

参考文献

- 相川良彦 (2006) 「山村における過疎・高齢化の進捗と対応——山村と都市の比較調査報告」農林水産政策研究所編『農林水産政策研究所レビュー』19, 20-22.
- 橋本 力 (2016) 「介護支援専門員と家族との協力関係——家族からの支援協力を得るにあたって必要となるプロセス——」『社会福祉学』57(1), 42-57.
- 加来和典 (2015) 「第6章 過疎山村における交通問題

——大分県日田市中津江村の事例から」徳野貞雄監修 牧野厚史・松本貴文編集『暮らしの視点からの地方再生——地域と生活の社会学』九州大学出版会, 155-174.

北川太一 (2000) 「中山間地域における高齢者の介護意識に関する考察」日本農村生活研究会編『農村生活研究』109, 9-16.

厚生労働省 (2015) 『地域包括ケアシステムについて』 (https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/, 2021.1.30).

厚生労働省 (2016) 『地域共生社会の実現に向けて』 (https://www.mhlw.go.jp/stf/newpag_e_00506.html, 2021.1.30).

厚生労働省 (2017) 『精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について』 (<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/chiikihoukatsu.html>, 2021.1.30).

村社 卓 (2011) 「介護保険制度化でのケアマネジメント実践モデルに関する研究——「調整・仲介機能を特化した管理給付業務」に焦点をあてた質的データ分析」『社会福祉学』52(1), 55-69.

農林水産政策研究所 (2020) 『農村地域人口と農業集落の将来予測——西暦 2045 年における農村構造』 (https://www.maff.go.jp/primaff/seika/attach/pdf/190830_2.pdf, 2021. 1.30).

農林水産省 (1999) 「食料・農業・農村基本法」 (https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=411AC000000106_20181022_430AC0000000062, 2021. 12.10).

佐藤郁哉 (2014) 『質的データ分析法——原理・方法・実践【初版第8刷】』新曜社.

鈴木裕介 (2015) 「中山間地域で暮らす要介護高齢者の医療福祉ニーズに関する研究——地域を基盤として支援を行っている福祉専門職に対するインタビュー調査を通して」『社会福祉学』56(3), 58-73.

高木健志 (2019) 「中山間地域における精神障害者への訪問型支援に関する一考察——訪問型支援を経験したことのある11人の精神保健福祉士へのインタビュー調査を通じて」『社会分析』46, 93-111.

高木健志 (2020) 「農山村におけるメンタルヘルスに関する福祉的課題とその支援の必要性と可能性について」『農業および園芸』95(10), 849-57.

高木健志 (2021) 『農村ソーシャルワーク』学術研究出

- 版.
- 高野和良 (2004) 「第4章 過疎農山村社会における生活構造と福祉意識——大分県中津江村の現状をもとに」山本 努・徳野貞雄・加来和典・ほか著『現代農山村の社会分析【第二版】』学文社, 76-92.
- 高野和良 (2011) 「過疎高齢社会における地域集団の現状と課題」『福祉社会学研究』8, 12-24.
- 高野和良 (2020) 「第1章 つながりのジレンマ」三隅一人・高野和良編著『ジレンマの社会学』ミネルヴァ書房, 3-16.
- 高野和良・徳川直人 (2021) 「特集『グローバル化と農村・過疎化』によせて」『社会学評論』71(4), 532-40.
- 徳野貞雄 (2004) 「第7章 少子化時代の農山村社会——『人口増加型パラダイム』からの脱却をめざして」
- 山本 努・徳野貞雄・加来和典・ほか著『現代農山村の社会分析【第二版】』学文社, 138-91.
- 得津慎子 (2005) 「社会福祉における家族支援——家族ソーシャルワーク方法論に向けて」『関西福祉科学大学紀要』9, 67-80.
- 山鹿市 (2021) 『山鹿市統計資料 令和2年度版』
(<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/www/contents/1545007312822/simple/tokei.pdf>, 2021.12.10).
- 山本耕平 (2021) 『ひきこもりソーシャルワーク——生きる場と関係の創出』かもがわ出版.
- 和気純子 (2005) 「高齢者ケアマネジメントにおける困難ケース——ソーシャルワークからの接近」『人文学報』351 (社会福祉学21), 99-121.

A Study of Difficulties and Challenges in Consultative Support for Welfare Issues in Rural Villages:

Interview Surveys with Care Managers

TAKAKI Takeshi

(BUKKYO UNIVERSITY, Faculty of Social Welfare)

Keywords: Rural villages, Welfare issues, Consultative support, Care managers

In this paper, we conducted a survey of four care managers who practice in rural villages, with the aim of identifying welfare livelihood issues in rural villages and clarifying difficulties and challenges in consultative support. Semi-structured interviews were conducted, and qualitative analysis was performed. The results indicated that care managers in rural villages face the following difficulties: “smo-

othly providing necessary support”, “supporting households which face various problems”, “having no choice but to follow procedure”, and “facing problems arising from distance and discrepancies within the system”. Furthermore, “cultural issues”, “practical issues”, and “institutional issues” were identified as challenges in providing consultative support in rural areas.